

I-3 橋本龍雲家伝の古医書類

小曾戸洋・町泉寿郎・花輪壽彦

平成十三年十一月、熊本県南小国町に旧来伝わった古医書を含む多くの文書類が、(社)北里研究所(東京白金)の北里柴三郎記念室に寄贈された。これらは当地の名医家・橋本龍雲家伝のもので、同家は北里柴三郎と姻戚関係にあり、柴三郎自身、幼少時、龍雲に学んだ縁からである。このたびそのうちの医学関係書の整理が終了したので、以下、同家の家系と、古医書類の概要について報告する。

初代 源兵衛(一六四〇〜一七二六)、名は次道のち次重。本姓は山本で、播州より来たり、肥後国阿蘇郡小国郷志賀瀬村(現在地)に居し、橋本を称し、代々医を業とした。享年八十七。

二代 源蔵(一六八六〜一七五三)、源兵衛の子。名は定道のち定重。医を継いだ。享年六十六。

三代 見理(一七一一〜一七七〇)、源蔵の子。一七四二年に家業を継ぎ、一七六八年郡代直触となった。享年六十。

四代 正伯(一七三六〜一七九七)は熊本宮原の郡医・上野玄参の二男で、見理に男子がいなかったためその女子を娶り、見理の嗣子となった。一七七二年に郡代直触、一七八三年には郡医となった。享年六十二。

五代 春琳(一七七七〜一八四〇)、正伯の子で、一七九八年に家職を襲い、郡医となった。享年六十四。

六代 龍雲(一八〇一〜一八七九)は上野氏の子で、幼少時、春琳の養子となる。広瀬淡窓の門に入り、また再春館の教師・町野玄叔に就いて医を修めた。郡代直触、郡医となり、藩の御目見医師に進んだ。文学読書をよくし、医業のかたわら塾を開き、門弟百数十人を擁して教育した。北里柴三郎もその一人である。享年七十九。

七代 淵泉(一八二四〜一八八七)は龍雲の子で、医業を継いだ。妻の満志は北里惟信(柴三郎の父)の姉である。享年六十四。

淵泉の子は夭折し、二人の養子を経て、最終的に稲田氏から浩を養子に迎えた。浩は小国にあって教育職・役人職を歴任したが、一八九七年、大阪に移住した。長男に深一、二男に弁次郎、三男に澄三、四男に瀬平がいる。家伝の品が保存してあった屋敷・倉の現在の所有者は東京在住の橋本龍男氏と大阪在住の橋本氏の二人。

橋本家から寄贈を受けた古医書類は一六九点、三〇八冊ある。古書全体は目下整理中だが、この二〜三倍、一千冊以上はあろう。

中国医書の和刻本は二六点ある。みな江戸時代の刊本。元和・寛永間の古版本も少なくない(『勿聴子俗解八十一難経』『明医雜著』など)。古版の日本医書もある(『運氣論口義』『医方大成論鈔』『類証弁異全九集』『局方発揮抄』『切紙』『修治纂要』『医法明鑑』『遐齡小児方』『惠徳方』など)。

刊本医書六二点に対し、写本医書のほうが多く、一〇七点ある。古くは慶長十七年写の『三位法眼家伝秘方』があり、同書には当時肥後国に相伝された経緯を示す奥書が記されていて興味深い。写本年度は下るものの永禄

十二年の奥書を有する『今新流鍼法伝書』なども稀本である。同書には安土桃山時代の北里氏の奥書も伝写されている。

内容的には、古いものでは明代医書、曲直瀬流後世方、小児医書、外科医書、眼科医書、鍼灸医書、経験処方集がある。比較的新しいものでは古方流の傷寒論関係書が少なくない。これは龍雲が村井氏再春館と関連をもつことに由来するであろう。その師・町野家家伝の医書も数点ある。さらに龍雲の稿本類もかなりある。

これら橋本家伝来の医書は、従来門外不出のものであり、九州一地域に江戸時代全期を通じて連綿と続いた医家の学問の実情を示す貴重な新出資料といえる。

本稿は文科省科研費・特定領域A(2)「江戸のモノづくりに」研究の一部である。

(北里研究所東洋医学総合研究所)